

司馬遼太郎

街道をゆく 二十三

南蛮のみち II



街道をゆく

二十三

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十九年 五月 十五日 第一刷発行

街道をゆく 二十三

定価 一一〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 初山有恒

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 五十三一二
電話 ○三十五五一〇二一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇一七三〇

©司馬遼太郎 一九八四年

街道をゆく

二十三

南蛮のみち
Ⅱ

本書には「週刊朝日」昭和五十八年八月十九日号・連載第六百回から十二月二十三・三十日号・六百十八回分までを収録。

目次

マドリッド周辺

7

悲惨のカステイリャ

9

劇的な酔っぱらい

25

はるかな「征服」

41

超心理学

57

ヨーロッパの異端児

73

紙とスペイン

91

トレドの街灯の下

107

エル・エスコリアル宮

123

ポルトガル・人と海

139

リスボン特急

141

ポルトガル人の顔

155

国境の駅

173

リスボンの駅

189

リスボン第一夜

205

テージョ川の公女

219

大航海時代序曲

235

モラエスなど

251

ファドの店で

267

サグレス岬へ

283

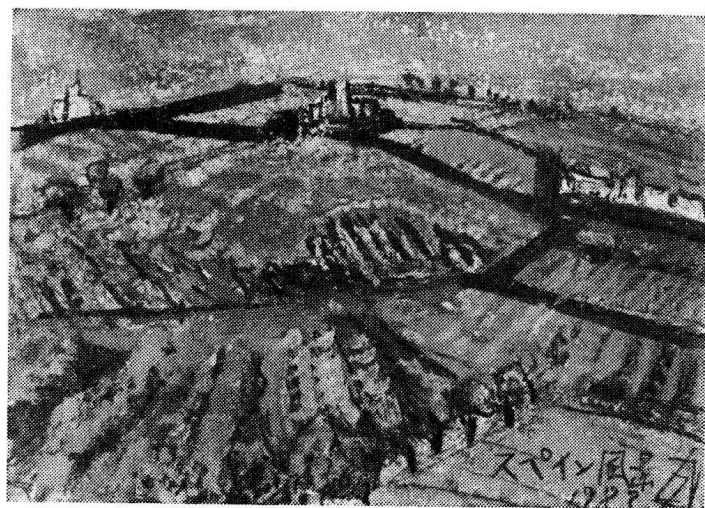
サグレスの小石

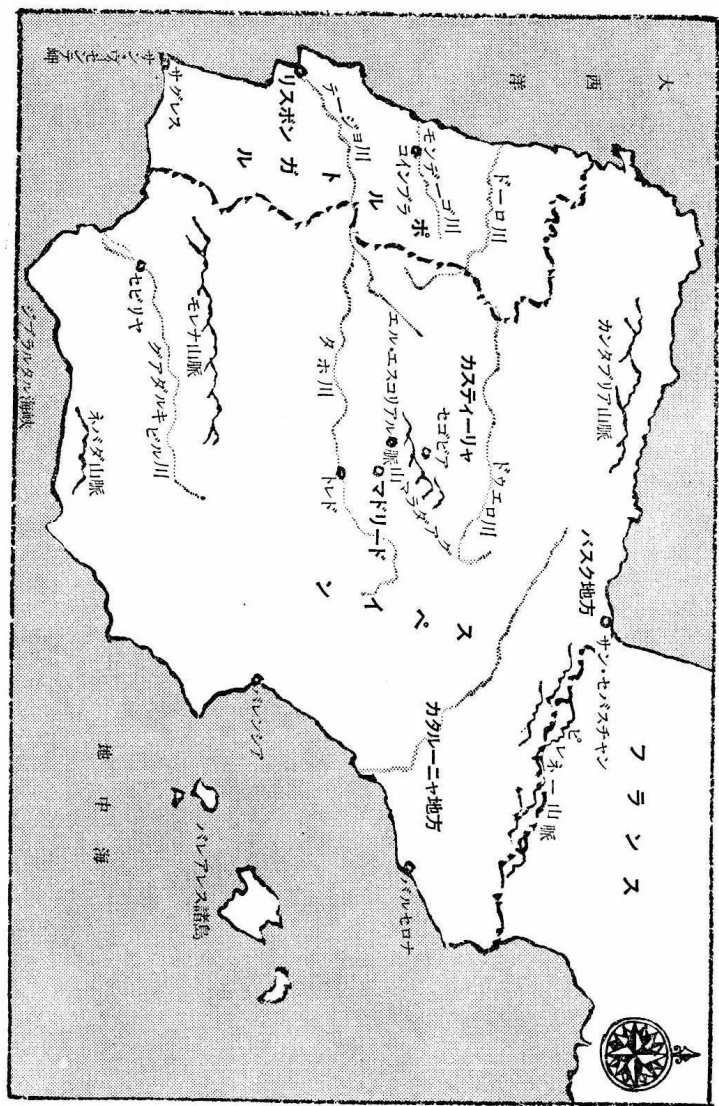
301

題字 棟方志功
え 須田剋太
装帧 原弘
地図 熊谷博人

マドリッド周辺

悲慘のカステイリヤ





十月五日、午前六時半、サン・セバスチャンのホテルで目が覚めると、前夜の小雨がつづいていた。

廊下のむこうから、部屋部屋のドアを叩く音が走りすぎてゆく。同行者の松丸朝子さんである。音が軽くて明るくてリズムカルで、おかしいほど音が人柄そっくりだった。

きょう、緑のビレネーに別れねばならない。バスク人のコンチータ嬢とも別れることになる。

空港のビルは、人がすくなかった。万事簡素で、朝食のためのイス・テーブルの設備などはなく、売店でパンを買い、ベンチで食った。

コンチータ嬢は、中高の顔に明るさをうかべつづけて、パンを買う世話まで焼いてくれた。彼女はボートの乗組員のように無口で、自分の役割に熱心だった。このことは、私どもの概念にあるラテン的な気質とはおよそ遠く、やはりバスク人なのかと思わざるをえなかった。

空港ビルから飛行場に出ると、そこに、私どもをスペインの首都マドリードに運んでくれる飛行機が待っていた。

「おや、フレンドシップ」

と、長谷忠彦氏は、こんなことでも楽しみをみつけた。懐しいなあ、と顔をチリ紙みたいにくしゃくしゃにした。フレンドシップはよく知られているようにオランダが開発した中型旅

客機である。溪流の魚体を思わせる姿で、かつては日本の国内線にも多く見られた。しかし大量輸送という交通経済の流行のために地球上から消えたかと思われていたが、それがスペインの国内線ではまだ働いていた。機首に、社名が書かれている。アビアコ(Aviaco)。

「アビアコは、フレンドシップしか持っていないんです」

スペインが好きな武部喜文氏は、かえってにべもない言い方をした。

午前九時に離陸し、針路を南西にとると、たちまちビレネーの緑はすぎ去った。

バスクのすべては夢だったとおもわざるをえない。やがて眼下に赤茶けたスペイン内陸部があらわれた。川の流域だけがわずかに緑色に刷かれていて、あとは起伏の多い半沙漠というにちかく、ただ、点々とオリブの樹が見られるのがわずかな目のやすらぎだった。オリブ栽培はスペインにとって農業で、林業ではなく、この樹木そのものも、大地に森林的效果をもたらすようなものではない。タクラマカン沙漠に疎生するタマリスクに森林的效果がないようなものである。

「これが、メセタですか」

窓に顔をくっつけながら武部氏にきくと、そうです、と答えがもどった。

スペイン語でメセタというのは階段の途中の広い踏板——踊り場——のことである。

この国の地勢を梓^わづける山脈はビレネー山脈と、ビスケー湾をのぞんで東西に走るカンタブ

リア山脈で、「状をなしている。「の内部こそ国土の大部分をなし、いわばスペインそのものといっている。地勢としては標高六〇〇〜七〇〇メートルの高原であり、つまりは踊り場メセタをなしている。メセタは、半沙漠というべきだろう。

そこが、緑の多いフランスと異っている。

「スペインは、森をうしなって衰えたのですな」

と、私は武部氏にいった。

私の頭の中に充満している妄想がわからないために、武部氏はだまっていた。

私には、「森林と文明の停頓」という年来の妄想がある。

いま、広漠とした黄土層平原である中国の黄河流域は、太古は森林地帯だったといわれるが、ヒトが農耕社会をひろげてゆくにつれて樹が伐られた。殷・周帝国の勢威の基盤は農業である。農耕が進み、森が消滅した。それでも土が乾かず、農業が成立しえたのは、土一粒ずつに保水力をもつ黄土のおかげだった。その点、中国は世界の他の地域よりめぐまれている。

古代から近代寸前まで——コークス炉が発明されるまで——森林が金属をつくった。冶金のために、ぼう大な量の木炭が必要だった。中国では、殷・周から春秋戦国にかけて大量の銅器がつくられたが、そのために華北の森林はあとをとどめなくなったといっている。さらには、

前漢中期、武帝のころ製鉄が大いに栄えたことで樹木はいよいよ稀少になった。比例して、鉄器生産も漢以後漸減した。古代的段階において鉄器生産のゆたかさと社会の好奇心の沸騰とはかさなると思うのだが、後漢がおわるころから中国における好奇心の沸騰は減退しつづけたと思える。武帝の時代、儒教という、文明の停頓を正しいとする原理が国教として採用されたのは偶然ではないような気がする。

ともかく、中国では森林がすくなくなっても、黄土層と、揚子江流域の稲作のおかげで農業はつづけられた。

古代ギリシアの場合は、森林の消滅が、表土の消滅になり、地の骨が露呈して農業もなりたたなくなり、多数の人口を養えなくなり、文明そのものがほろんだ。

スペインの場合、ローマ人が最初にこの国土を見た場所がどこであったかはわからないが、兎がとびはねているのが印象的だったという。イスパニアの語源が「兎の国」という意味だということとは前巻にふれたが、兎が多かったというのは、草木がゆたかだったということにならないか。

有本紀明氏の『スペイン・聖と俗』(NHKブックス)から孫引きすると、紀元一世紀ポンベヨ・トロゴは、ガリア(フランス)より肥沃な地であるという旨のことを書き、あらゆる果実に